

私達の教育改革通信

第 85 号 2005/9

教育通信ホームページ

<http://cert.kyokyo-u.ac.jp/oka-index.html>

<http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/>

先事館制作室進士多佳子〒106-0032 港区六本木7-3-8ビルガ 910

発行人:西村秀美,先事館箕面 〒562-0023 箕面市粟生間谷西3-15-12

ロンドンにいる孫娘への手紙

辻 良夫

ロンドンはいま燃えていますか？私が留学していた1958年ごろも、ある意味ではロンドンは燃えていました。それは日本の刺激によって、英・仏・オランダ・ベルギーなどによって支配されていた植民地が独立を主張しはじめたからです。インド、ビルマ、インドネシア、アフリカ諸国はいうまでもなく、強大な宗教イスラムが普及している広大な地域の民衆が自立を求めて立ち上がったからです。強力な民衆の指導者たちが独立を主張しはじめたためです。サウジアラビア、イラン、イラク、湾岸諸国、北アフリカ諸国などの広大な産油国が動き始めたのです。英国はこれらの国を王国にし、石油の膨大な資本によって王の権力を維持しようとしたのですが、長く続きませんでした。この頃私はロンドンに留学して原子力を学んでいたのです。その頃イスラム系の大学院生と下宿でよく議論をしたことを覚えています。「原子力は爆弾だ。西欧諸国はその威力で産油国を押さえ込み、石油を独占しようとしている。彼等の主張は非常に明解でありましたが、私は原子力によって敗戦国日本を豊かにすることだけを考えていました。恥ずかしい話です。

英国はもう一つの問題を国内に抱えていたのです。それは北アイルランドの紛争です。長い血みどろの戦いが続いていたのです。私が留学生としてバーミンガムの駅についた前日、この駅の売店でテロがあったそうです。また翌日の新聞は北アイルランド（IRA）の軍隊が国境に出動したことを報じていました。

先日テロのあった地域（ハイドパーク、王宮、地下鉄Euston駅など）は、私がバーミンガムから汽車で2時間あまり、休日を過ごし、宿泊した懐かしいところです。周辺は英国人の経営する安宿ばかりでしたが、地方から出てくる学者やインテリイの泊まる宿で楽しかった記憶

お願い：教育通信はオープンメディアに移行しつつあります。これまでの方式に加えて、新たに加入される方A(購読会員(実費1号100円、年会費1200円)、運営に参画されるB(協力)会員及びC(編集)会員になって下さる方を歓迎します。B会員には自己負担でコピーと友人への配布、C会員にはそれに加えて編集を輪番でお願いします。私達の教育通信が今後どう発展するか、この新方式がよい日本文化になることが望まれます。

編集：先事館吉祥寺 海野和二郎 180-0003 武蔵野吉祥寺南 4-15-12

先事館狭山、菅野礼司 〒589-0022 大阪狭山市西山台 1-24-5

先事館近大理工総研 湯浅学・川東龍夫〒577-8502 東大阪市小若江

先事館京都教育大 岡本正志〒612-8582 京都市伏見区深草藤森町 1

先事館中野 茂木和行 165-0035 中野区白鷺 2-13-3-409

があります。1989年、30年ぶりに訪問したホテル周辺はインド人、アラブ人などが一杯で私が愛用したホテルはありませんでした。

貴女の大学のある地域はテロに弱い文化都市です。いざというときには退避する道筋をよく理解しておいてください。燃えるロンドンでたいけんしたことは素晴らしい思い出になるでしょう。祖父と孫が半世紀近くたって世界の焦点にたったのは偶然ではないと思います。

ご健闘を祈ります。

医療の共通性

各大学医学部の処方箋の書き方

立石 昭三

私どもが医学部の学生であった頃の学生運動は伝統的反戦自由の他に、臨床とあまり関係のない実験研究による医学博士の制度を廃して、医学部の講座制を潰すことであつたが、当時の紛争が目標も示すことが出来ず不毛なこともあって、学生運動はやがて沈静化し、またまた博士論文の取得者が医学部の同窓会誌にも復活してきた。初心を忘れ、紛争破りでいち早く学位を取得した要領のよい医師も出てきたが、臨床医の条件として学会主導で認定医、専門医、指導医などのランク付けが確立されるに従って、卒後、母校の講座に入局する人も少なくなり、これらの資格を取りやすい市中の公私立病院、特に教育病院と言われる卒後教育に熱心な病院に研修医として入る方が多くなった、これは今まで卒後教育に熱心でなかった大学には痛手であつたが、同時に大学から医師を派遣してもらっていた地方の病院にとっても痛手で、小児科、産科のない病院などは医師確保に苦勞をしているのは新聞紙上にもよく出て、ご存知の通りである。

それと同時に学閥を無くそうと言う声もあつたが、こ

れは同窓会のエゴや内務省の流れを汲む厚生省の消極性により改善は一向に見られない。段々、大学系の病院が少なくなる方向にある中、医師によって処方箋の書き方に差があってはならないのにこれが違うのである。これは世界共通であるべきであり、医学雑誌の薬の広告でも世界共通の表現法で用法が記されているのにこれが医師により、病院により、出身大学の約束処方により異なるのである。ある医師は一日服用量を記し、ある医師は一回服用量を記す。そしてそれは食事の前か、後に服用すべきかを記す。薬の中毒量は一回服用量であるのに、一日服用量を書くのが日本では一般的である。アラブでも東南アジアでも、ネパールのような発展途上国でも医師は一回服用量を記す。

世界的に食事を一日三回取れる国民は少ないと言ってもよいのに一日服用量を記し、三回に分服する、と言うのが日本で最も普通の処方の書き方で、あまり世界的に通用する処方箋ではない。ある大学系の病院に行ったところ、薬品名まで符牒で記され、その大学出身者でなければ何の薬か判らない、と言うことがあった。これは恥ずかしながらわが母校の約束処方箋集にも見られる。そしてこれは大学のムント（勢力下の系列病院）の拡大にまで連なる問題でもある。講座制の崩壊は他動的に実現されたが、学閥の解消は未だである。

アインシュタインの自然観と思考法

・一般相対性理論：重力理論

菅野 礼司

「特殊」から「一般」相対性理論に進んだ論理的理由

特殊相対性理論の正しさは、きわめて高い精度で検証されたが、2つの点で理論的に不満足なところがあった。

第1：「特殊」という形容詞が示すように、ローレンツ変換は、互いに等速運動をする慣性系間の関係を与えるだけで、加速度運動をしている一般の座標系への変換法則については言及していない。

第2：“ニュートンポテンシャル”として知られてきた重力場（遠隔作用）を、特殊相対性理論の枠内で取り扱うことができないこと。光速度が最大の速度であるとする特殊相対性理論の立場からして、瞬間的に伝わる遠隔作用は認められない。

電磁場のマクスウェル方程式はローレンツ変換に対して不変であるという点で、特殊相対性理論の帰結と見事にマッチした。それに対して、万有引力の法則はローレンツ変換によって形が変わる。特殊相対性理論は、重力

場の問題を取り残した。

それゆえ、万有引力も、電磁気力のように、重力場によって定式化したいと思うのは当然である。

自然法則の客観性

自然は人間がどう考えようとも、自らの法則にしたがって運動している。だから、本来、自然法則は人間が考え出した記述の仕方によらず決まっているはずである。

自然科学の理論は座標系の取り方や物理量の表現の仕方などの人為的なものにはよらないはずである。その点で、基準系を互いに等速運動をする慣性系に制限するという理論は、まだ特殊であって人為的なものを含んでいて不満足である。

制限を加えない任意の座標系で成り立つ法則が一番望ましい。

慣性系という制限を捨て、人為的な要素を科学の理論から排除し、加速度系も含めた任意の座標系を許す一般相対性理論への拡張は、理論の客観性を目指す自然科学としては当然の要請でもある。

1915年、アインシュタインは、これらの要請を充たす一般相対性理論を発表した。

新たな基礎原理が必要

ニュートン力学と特殊相対性理論では、重力作用の伝播については一切立ち入ることができない。それゆえ、重力場の本性とその伝達機構を明らかにする理論をつくるには、ニュートン力学とも特殊相対性理論とも異なる、別の原理が必要である。

その原理は、質量についての等価原理である。この等価原理に着目し、それが重力理論の基礎原理であることを見抜いたのはアインシュタインの卓見である。等価原理は重力による運動において、物質の種類や性質に関係なくすべての物質に対して普遍的、かつ厳密に成り立つ原理である。

等価原理について

重力による物体の落下加速度は、すべての物体について等しいということから、重力質量と慣性質量は同等である、という等価原理は経験的にわかっていた。

アインシュタインは最初は、次のような推論で等価原理を導こうとした。特殊相対性理論においては絶対速度について語る事が出来ないのと同様に、基準系の絶対加速度についても語る事は出来ないはずである。それならば、重力場中ですべての物体の落下速度が等しいのは自明であるといって、等価原理を導出しようとした。しかし、このような論理で等価原理を導くことは当然ながら無理であった。

そこで、この推論を逆転させて、等価原理をもとにし

て、重力場の中での運動を記述する方向に向かった。

エレベータの思考実験

エレベータが加速度をもって上昇するとき、中に乗っている人は体が下に押しつけられ、手にもっている荷物は重くなったように感じ、逆に、加速度下降するときは、体が軽くなったように感ずる。エレベータの加速は重力の増大や減少と同じ効果を生み出すだろう。エレベータを吊している鎖を切って自由落下させると（地球の重力加速度と同じ加速度で落下）、中の人は床に対してなんの圧力も感じなくなり、手にもった荷物の重さも感じなくなり、荷物を手から離しても宙に浮く（無重力状態）、外の状態が全然わからないようにしてあれば、中の人はエレベータが加速されたのか、地球の重力が急に増したのか、消えたのかを区別できない。

この現象は、慣性質量と重力質量とが完全に比例しているという質量の等価原理のためである。この2種の質量が同じであるために、重力によって生ずる加速度は重さに関係なくすべての物体について同一であるから、自由落下するエレベータの中では、重力が消失したように感じる。

光の湾曲と赤方偏移

特殊相対性理論のエネルギーと質量の同等性から、 $E = h\nu$ の光は、 $h\nu/c^2$ の質量に相当する。だから、重力場により光の軌道は曲がる。また、強い重力場の中では光の波長が短くなり、弱いところでは波長が伸びる（赤方偏移）。

すると、重力場の中では「光速一定性」（座標時間と座標距離で表した光速）は成り立たない。重力理論においては、特殊相対論の基礎原理であった光速一定性を、自ら放棄せざるをえないことになったが、理論を先に進めるためには、既成のものにこだわらない姿勢がここにもみられる。

一般相対性理論の2つの原理：

特殊相対性理論とは異なる原理

一般相対性理論の基礎として次の2つの原理を置いた。

- (1) いかなる座標系においても物理法則は同じである（一般相対性原理）
- (2) 一樣な重力場の中にある慣性系と、その慣性系に対してその重力加速度と同じ加速度で運動している無重力座標系とは力学的に同等である（等価原理）

一般相対性の原理だけでは、力学理論を組み立てることはできない。特殊相対性理論も慣性系について、運動の相対性に加えて光速一定性の原理が必要だったように、もう1つ力学の中味を規定する原理が必要である。その基礎原理として、等価原理に着目したところがポイントである。

2番目の「等価原理」は特殊相対性理論の「光速一定性の

原理」と全く異なっているから、単に運動の相対性を慣性系から任意基準系に広げ、座標変換を一般変換に拡張しただけではない。それゆえ、特殊相対性理論と一般相対性理論とは、かなり異質な理論である。

質量の等価原理と一般相対性原理からの帰結

一樣重力場と加速度系は同等 局所的重力は局所加速度系と区別できない。

重力場のもとでは、すべての物体は重さや質によらず、初期条件が同じなら同一運動をする。それゆえ、重力場を空間の「歪み」に帰着できたのである。（重力の幾何学化）

ユークリッド幾何学からリーマン幾何学へ

アインシュタインは、最初は、ニュートンのスカラーポテンシャルを用いて、静的重力場を定式化した。次に、動力学的重力場へ進むことは非常に困難で、悪戦苦闘した。

任意の加速度系を許すなら、ユークリッド空間では不可能であることに気づいて、動的重力理論はリーマン幾何学を用いて定式化しなければならないことを認識した。一般相対性理論を正しく記述するのはリーマン幾何学であることに気づいてからは、友人の数学者グロスマンに協力を求めた。

リーマン幾何学に対するこの認識の変化は、アインシュタインの物理学の理論観と数学観を変えたそうである。物理学における幾何学（数学）の役割の重要性を強調して「幾何学を捨てて物理学を記述するのは、言葉なしに思想を表すのに等しい」とまでいった。この言明からは、数学的自然観を強調したガリレイの言葉「自然は幾何学の言葉で書かれている、（それを解釈するのが科学である）」が思い出される。

数学は、物理学を記述するための「単なる手段」として必要な言語とみる立場もある。その数学観では、一つの物理学理論を記述する数学は一通りに限らず、複数可能であることになる。そして、いずれの数学もその物理学を記述する手段として同等であるとみる。

ポアンカレの便宜主義 (conventionalism) はこの立場である。それによると、一般相対性理論の記述はユークリッド幾何学でも可能である、ただ物理学の理論体系が複雑になるだけでだというのである。リーマン幾何学を用いれば、物理理論は綺麗になるが、数学は複雑である。単純な数学（幾何学）を用い物理学理論を複雑にするか、あるいはその逆にするかの違いであり、いずれも同等であるというわけである。

それに対して、アインシュタインの考えは、ある思想を表現するには、それに相応しい言葉でないとは正確に表

現できないように、一般相対性理論の内容（重力に関する自然の仕組み）はリーマン幾何学でないと正確かつ厳密には表現できないというものである。つまり、この理論を最も適格に記述するのは、この数学しかないというのである。

いずれの立場が正しいかは、一つの理論のみ見ていたのでは判断できない。物理学全体の理論形式を歴史的発展とともに見るべきである。しかし、一般相対性理論の場合、リーマン幾何学を用いて記述された理論形式から、演繹的に導かれた諸成果と、物理学のその後の発展の方向を見れば、いずれが正しいかは明らかであろう。特に、ブラックホール（概念（アインシュタインはブラックホールの存在を否定したが）はユークリッド幾何学を用いた理論からは生まれぬ。ここにも科学理論の予言能力の重要性をみる。

迷路に陥ったアインシュタイン

アインシュタインは、一般変換に対して共変な重力場の方程式は不可能であるという迷路に陥って、一時期思い悩んだ。

一般共変性を認めるなら、重力の源（エネルギー・運動量テンソル $T_{\mu\nu}$ ）の分布に対して、一つ以上の時空の計量テンソル $g_{\mu\nu}$ の分布が可能になるという論理を示した。そして、「もし、 $g_{\mu\nu}$ が $T_{\mu\nu}$ によって完全に決定される（物質分布によって時空の構造と性質が決まる）という要請に固執するならば、基準系の選択を制限せざるをえない」といった。

基準系の選択を制限することは、任意の加速度系に対して成り立つ一般相対性理論は不可能と言うことになる。これは大きな制約であり、当初計画の重大な変更を強いられることになる。

しかし、この推論は誤りであった。その誤りの原因は、重力場の方程式によって、重力の源 $T_{\mu\nu}$ が与えられれば時空の計量テンソルは完全に決定されるとしたからである。

アインシュタインの重力方程式

$$R_{\mu\nu} - g_{\mu\nu} R / 2 = 8 \pi G T_{\mu\nu} / c^2$$

は、ゲージ変換で不変な理論である（ピアンキの恒等式を満たす）ことに、彼は気づいていなかった。電磁場のマクスウエル方程式がゲージ不変な理論であり、電磁ポテンシャルは一義的には決まらないのと同様に、重力方程式によって計量テンソルは一義的には決まらず、ゲージ変換の自由度がある。（重力理論が完成した1915年までにはこの問題は解決されていた。）（注1）

アインシュタインの重力方程式

重力方程式は2つの基礎原理から、論理的演繹により

必然的に導出される方程式で、他に選択の自由度はない。それゆえ、論理的に無駄のない整然とした理論形式である。さらに、この重力方程式は一般座標変換のもとで不変であるという点でも、もっとも美しい理論形式である。

アインシュタインは、一般相対性理論の主たる意義は、いくつかのほんの小さな観測可能な予言の効果ではなく、その基盤の単純性と無矛盾性にあると信じているように、その論理と形式の美しさに満足している。これは科学理論の本質に関するアインシュタインの視点と、審美主義的科学観の表明であろう。

相互規定的に自己発展するシステム

重力方程式の論理構成は、中味の物質分布状態（右辺）が、その入れ物である時空の構造（左辺）を決め、逆に入れ物の時空構造が中味の物質の分布状態を変えていくという仕組みである。

入れ物の時空構造と中身の物質分布が互いに他を規定するという仕組み、つまり、入れ物と中味が相互規定的に決まる仕組みになっているというところに重要な意義がある。この特徴は宇宙論で一層ははっきりする。

マッハ原理について

物質の慣性質量は他の物質の反作用で決まる。つまり、物質慣性の本性は、全宇宙の物質との相対的依存関係にある。それゆえ「すべてのものを宇宙全体に関係付けよ」というのがマッハ原理である。それは慣性ばかりでなく、物質のすべての属性や運動も全宇宙との関係で決まるというものである。

アインシュタインはこの頃、マッハ原理を重視して、物質の慣性は他の質量との相互作用で決まるという「慣性の相対性」を確信していた。そして、重力理論の基礎に第3の原理として、マッハ原理を置いた（1918）。

しかし、後にはマッハ原理に言及しなくなった。その理由は、マッハ原理をもとに初期条件、あるいは境界条件を外から与えなくともよい理論、すなわち自己完結的な宇宙論を構成することはできないと思うようになったからではなかろうか。（注2）

アインシュタイン宇宙論

アインシュタインの宇宙論にはマッハ原理が影響している。マッハ原理は、突き詰めれば、宇宙の構造は宇宙自体の存在の理法で決まる自己完結的論理を表したものである。しかし、重力方程式を解くには、外から付け加える境界条件が必要であるから、自己充足的なものではない。それゆえ、境界条件まで内包した自己充足的宇宙論でなければ、マッハ原理を十全に採り入れることはできないのである。

静的宇宙模型：宇宙の等方性と物質（銀河）の一様分

布という当時の知識を前提にして、重力方程式の一つの解として静的宇宙模型を提唱した。

この宇宙模型では、重力に打ち勝って静止状態を保つために、斥力となる宇宙項 g_{μ} を人為的に付け加える必要があった。この宇宙項は、重力方程式の他の項が論理的に導かれるのに対して、必然性のない付加項である。

後に、すべての恒星は互いに後退しているというハッブルの観測事実から、膨張宇宙が明らかになると、宇宙項は必ずしも必要ではなくなった。それゆえ、この宇宙項を付け加えたことに対して、アインシュタインは「我が生涯のうちで最大の誤り」と悔いた。

アインシュタインの審美主義：宇宙項を加えたことで、論理必然的に導かれたもっとも美しい理論である重力方程式を汚したと思ったわけである。それほどアインシュタインの重力方程式は論理的にも形式的にも美しく無駄のない見事なものであった。

(現代の膨張宇宙論では、この宇宙項が必要とされている。)

新しい存在の理法(自然観)

重力方程式の時空と物質の相互規定性から、宇宙は、
枠組みの時空と中身の物質は、互いに持ちつ持たれつして、
自己発展するシステムである、ということになる。

宇宙を一つの閉じた体系とすれば、宇宙の運動はその原動力を自らの打ちに内包し、時空と物質という対立物の相互作用によって自己運動するという、弁証法的な発展をする一つのシステムと見ることができる。それゆえ、物質と時空は不可分であり、互いに他の存在を前提として、それぞれの存在が可能であるということになる。

この自己発展のシステム観は、自然現象を局所的部分が原因 - 結果の時系列に従う連鎖的運動とみるのではなく、枠組みと中味が互いに同時に相互規定し合っていて(いずれも原因であると同時に結果である)運動発展していくとみる自然観である。

この意味で、この宇宙観は、それまでの自然認識の形式とは異質であり、「存在の理法」として画期的な自然観である。

ブラック・ホールを否定

一般相対性理論が発表されると、その翌年1916年にシュバルツシルトが、重力方程式の厳密解を最も単純な定常的球対称の場合について求めた。その解はシュバルツシルト半径($2GM/c^2$, G:重力定数、M:中心の質量)のところが特異面になっていて、そこでは時空間の歪みは無限大になり(時計は止まり、距離は無限)、その球面の内部からは光すら外に出られないというものであった。それゆえ、そのシュバルツシルト半径内の世

界はブラック・ホールと名付けられた。中心にある物質が高密度で質量が十分大きければ、その半径は星の外部にできて、ブラック・ホールは存在する可能性がある。

しかし、アインシュタインはブラック・ホールの存在を否定する論文を発表した(1939)。否定の根拠として、そのような特異面は実際にはできないことを、皮肉なことに、重力方程式を用いて示そうとしたのである。また、そのような超高密度の星は存在し得ぬことを、電子と陽子の高密度物質系(例;白色矮星)について、当時の熱統計力学の知識を基に示そうとした。その頃は中性子星の可能性はまだ知られていなかったため、ブラックホールを作るほどの超高密度の物質は不可能だと考えたのである。さらに、その特異面の直ぐ外では、星が安定であるためには光より早く運動しなければならないと主張した(実は、そこで星は安定である必要はない)。

光さえ出られないような特異面は、内と外の空間を分離して宇宙の中に別世界を形成することになるが、そのような特異性を認めたくなかったのではないかと思われる。なぜならば、アインシュタインは、宇宙の等方性と銀河の一樣分布を前提して定常宇宙模型を提唱したこと、そして自然の斉一性を想定した彼の自然観からして、宇宙の中に別の世界を作るようなものを否定する精神が作用したのではなからうか。

だが、後に、オープンハイマーやランダウらが中性子星の可能性を示唆し、実際にブラック・ホールは発見された。

(この「アインシュタインの自然観と思考法」につきましては、「量子力学」、「統一場理論」、「自然観と科学観」へとつづきます。)

ホロコースト以後の反ユダヤ主義の歴史的転換

関本 肇

今年(2025年)はアウシュビッツの解放60周年である。積雪の寂寞としたアウシュビッツの現場に各国指導者、宗教界の代表が集まって追悼式が開かれたが、日本からの参加があったかどうか知らない。ナチス・ドイツは第二次大戦中に600万人のユダヤ人を虐殺し、ショーワあるいはホロコーストと呼ばれる人類史上空前の民族抹殺の罪を犯した。わたしは1980年にロシア正教会創立1000年の記念に招かれて当時のソ連・東欧の諸教会を訪ねたが、ポーランドでは、特に頼んでアウシュビッツの訪問をした。四時間近くの見学であったが、日本人グル

ープのために通訳をした後の絶望的な疲労感は今も忘れることはできない。後に1992年から1995年までの三年間ニューヨークのミッションで働いたときに、どうしてもユダヤ教の中に入って学びたいと思い、ラビに願ったところ、入会を許されてユダヤ教を内側から体験できたことはわたしの人生での貴重な体験であった。毎週の安息日礼拝の終わりにKaddishの祈りがあるが、その最後に全員起立して、ホロコースト600万の犠牲者を追悼するが、驚いたことに、続けて広島・長崎の20余万人の原爆罹災者を記念して祈る。わたしは驚きと感動をもってラビにそのことを感謝し、同時に原爆被害者は戦争被害者であるが、ホロコーストの死者は戦争被害者とは質が違うと思うがどうかと尋ねた。それはわたしの意見でもあった。

ユダヤ人への迫害は、ヨーロッパ2000年の歴史をとおしてしばしば行われてきたし、その差別と偏見は様々な形で繰り返し続けられた。ナチスによる大虐殺はその極点に達したものと言えるのかもしれない。なぜユダヤ人はそんなに迫害されたのか、それほど憎まれたのか？ ずばりと言えば、差別者はわれわれキリスト教会であった。これについては、我々の課題であるから、教会は自ら追求し反省する責任がある。

第二次大戦の終局に近いころ、英国とフランスが、それぞれにユダヤ人、特にシオニストのユダヤ人にイスラエルの独立と建国を約束する。それはまるで過去2000年のユダヤ人迫害の罪滅ぼしのような響きをもった約束、それも内実は空約束のようなものであった。欧米のキリスト教がホロコーストの悲劇を真実に受け止めていたのなら、パレスチナの戦後は、今のような紛争の増埒にはならなかったと思う。人類はあの悲劇を忘れてはならぬと誓ったのに、ユダヤ人への偏見はヨーロッパ人の中から消えてはいない。大戦後1947年にユダヤ人の唯一のシェルターとして誕生したイスラエルの国を、西欧諸国は冷淡な眼差しを持って(アラブ諸国が連合して、すぐにでも潰してくれることを念じながら)傍観していたのである。国際政治というものは、自国の利益のみを求めるそれほど冷淡な代物である。

しかし欧米においてホロコーストの悲劇は大きなトラウマとしてずっと残っていることは事実である。加害者側にたつキリスト教会はそれを忘れることはできない。ナチス(Nationalsozialist)はキリスト教国ドイツに出現したのである。またキリスト教国の顔をしている英米はユダヤ難民救済に消極的であったし、カトリックはユダヤ人迫害に沈黙を守り通したのである。なぜか？ 欧米キリスト教国(世界のキリスト教会も)は、このユダヤ

人からの追求にまだ応えていない。

ここで西欧におけるユダヤ人への偏見と迫害の長い不幸な歴史に触れないわけには行かない。4000年以前のアブラハムに始まるイスラエルの人々は、紀元70年にローマに滅ぼされて、それ以来故郷を追われて世界に離散、流浪している。しかし国を失ってもユダヤ教を中心に民族の団結を守って、ディアスポラと称されるユダヤ人たちはヘブライ聖書を纏め、またタルムードという大部の経典を編纂してユダヤ教の基礎を作り、世界に散在する会堂(シナゴーク)を通して、ラビと呼ばれる指導者たちが民族を指導した。

ところでローマに滅ぼされる少し前に、ユダヤの国にイエスが現れてユダヤ教の改革を説いた。彼は無欲な自然生活を理想とするギリシア哲学の一派、ソクラテスの流れにある犬儒派哲学者風の教師として、貧しい生活を送りながら愛の実践を説いて民衆に支持され、特にユダヤ人口の9割を占める貧しい人たち(地の民・アム・ハーレーツ中心はガリラヤであった)の多くから支持された(バートン・マック:失われた福音書)。しかしイエスはユダヤ教指導者層から排斥され、ローマ官憲からは謀反罪の犯人として十字架刑に処せられたと言われる。(しかしイエスの死後、その弟子たちはローマ帝国内で増え広がり、4世紀になると、キリスト教としてコンスタンチヌス皇帝の時代に、帝国公認の宗教となり、皇帝はこのキリスト教を用いて帝国の統一と支配の道具とした。キリスト教歴史家の多くは、このキリスト教公認によって教会の墮落が始まったとする。)

ここでファリサイ派(パリサイ人)について学んでおく必要がある。彼らはハスモン家の抵抗運動(マカベア書)を通して現れたセクトであり、独立運動の中心的役割を担ったハシディーム(敬虔派)の継承者である。サドカイ派の貴族層に対して、ファリサイ派は庶民の中であってシナゴーク礼拝を支持し、またトーラー(律法)と預言者の教えを宣教した。しかしハスモン国家では、エルサレム神殿とユダヤ議会を支持するサドカイ派によってユダヤ議会から追放され、パリサイ分離、と呼ばれたともいわれる。サドカイ派も前2世紀に形成されたセクトで上層ユダヤ人である祭司、商人、貴族に支持者を持ち、神の存在を神殿に限ると考え、ファリサイ派はシナゴークにも神は存在すると考えた。サドカイ派の神は人間への関心を持たず、ファリサイ派は、歴史を支配する神を主張し、人々の中で宣教した。イエスを十字架で殺せと主張した祭司中心のサドカイ派(ここにはファリサイ派の姿はない)は、70年のエルサレム神殿の崩壊をもって滅亡し、ファリサイ派はそれ以後のユダヤ

人共同体の再建を担うことになる。マックス・ヴェーバーは「古代ユダヤ教」のなかで、ファリサイ派をヘレニズム主知主義にたいする抵抗運動としてとらえ、古代における宗教改革者と定義している。そしてファリサイ派の思想は、パウロを通して原始キリスト教に影響を与えたと述べている。彼はまたファリサイ派の中心は聖餐式だとしている（安息日のろうそく、Kiddush, challah）。ファリサイ派、あるいはファリサイ人についてごく一部を書いてみたが、今まで教会で、あるいは福音書から、ファリサイ人について、聞き、また理解していたこととは違う情報ではないかと思う。

ユダヤ人はなぜ迫害されたのか。現在でも欧米では道路上に、あるいは駅や公園に差別反対の「Anti-Semitism」の標識を見るし、アメリカではこれに「Racism」が加わる。反ユダヤ主義は根絶されておらず、多くの人々が依然としてユダヤ人に対する差別意識と偏見感情を持っているしるしである。これを歴史的に見ると、それには教会の理解と福音書の記述が反ユダヤ主義を生み出しそれを助長したことは確かであろう。しかしこの指摘と追求とは長い間、キリスト教ではタブーであった。しかし近年の福音書資料研究によると、反ユダヤ主義の要素は初期の資料層には見られず、福音書の成立段階に徐々に混入したものだと言われる。草創期から発展期の原始キリスト教はさまざまの試練に遭遇するが、早い時期にユダヤ教からの迫害があり、特にシナゴグからの追放は、それまで慣れ親しみ、また宣教の足場でもあった会堂から追われたことは痛手であった。先に見たように、ファリサイ派の体質は初代のキリスト教のそれと同質である。ユダヤ教から生まれたキリスト教がその独自性と正当性を主張するために、ファリサイ派を批判するようになったのは自然の成り行きであったかもしれない。反ファリサイズムがどのように福音書の中に入っていったかを検証する研究が、今までにかなり整理されて発表されている。

21世紀の聖書学は、キリスト教の伝統をひっくり返すと言われている。福音書の初期の資料層には反ユダヤ的な要素は見られず、それは福音書の最終成立の段階において混入したものとされている。しかしそれは、たとえば4世紀の教父、ヨハネ・クリソストム（金口の聖ヨハネ）を通すと次のようになる。このヨハネは著名な説教者であり、また聖書釈義家でもあったが、言葉が溢れてはみ出した結果、不幸な生涯を送ることになった人物である。「ユダヤ教の会堂は売春宿より腐敗している。そこは悪党たちの巣窟であり、野獣たちの休息所。偶像崇拜の礼拝にふける悪の神殿。悪魔とユダヤ人の犯罪集

団の巣窟、キリストの刺客者たちの集会所、悪魔たちの隠れ家である。」7世紀にアラビア半島にイスラームが生まれるが、やがてイスラームは聖地エルサレムを支配する。これを奪還するべく教皇ウルバヌス二世の発議で11世紀末に十字軍が生まれ、つぎつぎに8回にわたる十字軍の遠征がなされる。十字軍は遠征途上でユダヤ人を殺害し略奪する。最終的には1291年に、第一次十字軍が作ったエルサレム王国は滅亡し、イスラームの軍隊によって十字軍は地中海沿岸一帯から全面撤退し、教皇の権威も失墜する。しかし、ヨーロッパに居住するユダヤ人は十字軍によって様々な非人道的な迫害を受けてきたのであった。ユダヤ人迫害はキリスト教が主役である。プロテスタントもカトリックに引けを取らない。マルチン・ルーテルは当初カトリックの反ユダヤ政策に批判的であったが、彼はユダヤ人が自分に共鳴してキリスト教に改宗してくれると思っていたが、それを拒否されたことを知って逆上し、ユダヤ人への悪意に満ちた文書を出した。「ユダヤ人と彼らの虚偽」がそれである。それはユダヤ人への誹謗を述べ、具体的にユダヤ教の会堂を焼き払え、その住居を破壊せよ、聖書とタルムードを没収せよ、キリスト教徒の居住地からユダヤ人を追放せよ・・・と言うものである。ヒトラーはこれを受けて「我が闘争」の中でルーテルをドイツ三大人物の一人とし、1937年11月9日の夜「クリスタルナハト（水晶の夜）」の暴動はルーテルの指示通りにやったと言う。彼はドイツ中の会堂を破壊し、ユダヤ人を迫害したのである。1994年、米国の福音ルーテル教会協議会はこうしたルーテルの反ユダヤ思想を公式に拒絶している。ユダヤ人迫害の歴史や物語は述べればきりが無い。要は、欧米キリスト教諸国においては、今なお根深い反ユダヤ主義、反ユダヤ的感情が消えがたいことを理解する必要がある。しかしわたしの言いたかったのは、キリスト教の、反ユダヤ主義の歴史的転換についてである。

ローマの教皇ヨハネ・パウロ二世が去る4月2日に逝去した。その葬儀には日本を除く世界の国々から、多数の人々が心からの哀悼を持って参加した。ユダヤ人はどうであったか。数百人のラビやユダヤ人が葬儀に出席したのである。イスラエルはこの教皇が個人的にもユダヤ人を愛し、歴代教皇の中でもユダヤ教との関係を最も誠実に回復する努力をしたことを認めていた。彼の名はすでにユダヤ民族によって愛情と尊敬の念をもって記憶されているのである。ヨハネ・パウロ二世、本名カロル・ヨゼフ・ヴォイティワは1920年、ポーランドに生まれ、大学二年の時に第二次大戦が勃発、ナチス・ドイツに祖国が占領されたなかでナチスの暴虐を目撃する。彼

は良心の命ずるところに従って司祭への道を志したが、1964年には古都クラフクの大主教に、64年枢機卿になり、1978年第264代目の教皇に選ばれた。対ユダヤ関係を追ってみると、1988年、ローマ教皇としてローマ市内にあるユダヤ教会堂を訪問した。これは歴史上初めてのことである。そのとき彼は会堂のラビを抱擁し、スピーチの中でユダヤ教徒に「私の兄 elder brother」と呼びかけた。1993年にパチカンはイスラエル国と正式に国交を結んだ。イスラエル国を認知したのである。しかしパウロ6世が教皇として始めて聖地を訪問したときには(1964年)彼は一度も「イスラエル」の名を口にしなかった。ユダヤ人国家を認めようとしないパチカンの姿にイスラエル人は失望した。これにはイスラーム世界の反発を恐れる外交的判断があったかもしれないが、これらのパチカンの内部的な抵抗を抑えて勇気とカリスマを持って前進したのがヨハネ・パウロ二世である。彼は1994年に「2000年にわたって世界に散り散りになったユダヤ人が祖国に帰ろうと心に決めたことは理解されるべきであり、それはユダヤ人の権利である。」と語っている。これはある意味では教皇の反カトリック的な言動ともいえる。さらに2000年3月、ヨハネ・パウロ二世は七日間にわたる聖地巡礼に訪れた。ベングリオン空港にはワイツマン大統領、バラク首相が出迎えた。ベツレヘム訪問とアラファト・パレスチナ議長との会談もあったが、ユダヤ人にとって重要だったのは、大統領官邸訪問と、その会談であった。キリスト教会がイスラエルに対して具体的にしめた行動は、反ユダヤ主義の古い思考に終止符を打ったと言える。彼はさらに、ホロコーストの記念館「ヤッド・バシェム」を訪ね、ナチスの犠牲者を追悼し、巡礼最終日には、あの「嘆きの壁」の前に頭を下げて祈りを捧げ、過去に教会が犯した罪の赦しを願った。(この教皇の謝罪は「第二パチカン公会議の背景とその現代的意義」の中で、2000年3月12日、パチカンの聖ペテロ大聖堂で教皇と7人の枢機卿が、教会1000年にわたる重大な罪の数々を懺悔した詳細の中で述べたものに続いている)

ヨハネ・パウロ二世、青年時代のカロール・ヴォイティワは、祖国ポーランドが占領され、大学の閉鎖(ナチスは神学教育を禁止)時代には採石場で労働し、地下神学校で学んだ。彼には多くのユダヤ人の友人もいた。イスラエルの首長ラビは彼の親友でもあった。ワルシャワに張り巡らされた地下道には、当時のナチスを逃れながら抵抗した、文字通りの地下組織の痕跡が今も見られるし、町の中心にはトーラを高く掲げたラビを先頭に行列を作って避難するユダヤ人の大きなレリーフのある記念碑が

建っている。カロール・ヴォイティワは反ユダヤ主義と戦う姿勢を示した教皇である。1992年に「反ユダヤ主義は神と人類に対する罪である」と宣言している。その頃のピオ12世はユダヤ人の戦災孤児に洗礼を施すようにとの教令を出していたが、ヴォイティワ神父は、それに反抗して孤児たちをできるだけユダヤ人のもとに帰すようにしていた。ヨハネ・パウロ二世はユダヤ教とキリスト教は宗教的に同じ起源のものであり、「救いの歴史」を分かち合うもので、キリスト教がユダヤ教に取って代わるものでないことを鮮明に語り、欧米において反ユダヤの思想を捨てて兄弟としての対話を続ける姿勢を示したのは、2000年の歴史の中で一大転換であるといわれねばならない。

カトリック教会が質的な大変革を遂げたのは1962年からの第二パチカン公会議であるが、従来の「教会の外に救いなし」の考え方を捨て、教令「ノステラ・エターテ」(諸宗教宣言)で、ヒンズー教、仏教、イスラーム、ユダヤ教、その他の自然宗教との関係は、相互に対話の関係であることを宣言した。この宣言の中で、イエスの十字架の責任はユダヤ人が負うものでないことを語り「無差別にその当時のすべてのユダヤ人に、また今日のユダヤ人に、キリストの受難の際に犯されたことの責任を負わせることはできない。・・・ユダヤ人は神から排斥された者であるとか、呪われた者であるとか言うことが、あたかも聖書から結論されるかのように言うてはならない。」しかしこの「ノステラ・エターテ」はまだ中途半端であり、ユダヤ人に未曾有の災禍を及ぼしたことへの謝罪の言葉はないし、教会こそは「新しいイスラエル」という神学も残っている。パチカン内部にもユダヤ人への偏見は根強く残っているであろうし、一方、イスラエルには東欧ロシア出身の正統派が圧倒的に多く、対話など不可能という気分もあるであろう。現在アメリカでは、改革派ユダヤ人、保守派ユダヤ人、そして正統派ユダヤ人と分類して、改革派と保守派のユダヤ人とは自由な交流と対話ができるが、正統派はイスラエルの伝統的保守主義と同じで、自分たち以外との交流は難しい。これはキリスト教界においても同様で、19世紀型の保守的な教派もあれば、教派自身が統一されていない諸派もある。信徒のあいだでは関心も薄いであろう。2000年の偏見と分裂の歴史から寛容と対話の世界を切り開かれていくのはこれからの課題である。しかし我々は、ヨハネ・パウロ二世の決断と実行力によってユダヤ(人)教差別の扉が打ち破られ、21世紀へと希望の扉が開かれたことをしっかりと感じ取っていきたいと思う。

(85号編集：湯浅・川東)